

りんご病害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
黒星病	やや早	やや多	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年秋期の発生園地率は平年よりやや高かった。(+) (3) 5月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
モニリア病 (実ぐされ)	やや早	並 (平年少発生)	(1) りんごの生育は平年より早い。 (2) 前年の発生園地率は平年並に少なかった。(±)
赤星病	－	並 (平年少発生)	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(－)
うどんこ病	－	並 (平年少発生)	(1) 近年の発生は、一部園地で見られるが全般的に少ない。(－)
斑点落葉病	－	並	(1) 5月の気温、降水量はほぼ平年並の予報であり、特に感染を助長する条件ではない。(±)
腐らん病	－	並	(1) 開花直前の巡回調査では、発生園地率は平年並だった。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(－)：少発要因、(－)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【共通事項】

(1) 5～6月は、多くの病害の重点防除時期である。防除薬剤の散布間隔が空きすぎないように注意するとともに、降雨前の予防散布を心がける。

【黒星病】

- (1) 黒星病を対象としたDMI剤及びSDHI剤の使用は、耐性菌出現を回避するため、落花期までとする。
- (2) 散布ムラが無いように十分量を丁寧に散布する。
- (3) 発病葉や発病果は二次伝染源となるので、速やかに摘み取って園地外へ持ち出し、地中に埋没させる等して処分する。
- (4) 苗木を定植する際は、頂芽のりん片で越冬する可能性があるため、必ず頂部を切り返す。
- (5) 苗木及び未結果樹も成木と同様に防除を徹底する。

【モニリア病】

(1) 葉ぐされ、実ぐされは早めに摘み取り処分する。

【赤星病】

(1) 開花直前散布や落花期散布に黒星病対象のDMI剤により同時防除する。

【うどんこ病】

- (1) 開花直前散布や落花期散布に黒星病対象のDMI剤やカナメフロアブルにより同時防除する。
- (2) 前年多発園では、落花期にコナケン顆粒水和剤を特別散布する。

【褐斑病】

(1) 前年発生園では、落花期散布～落花20日後散布にデランフロアブルやセルカディスDフロアブル、ラビライト水和剤を用いる。

【腐らん病】

- (1) 罹病枝は開花期頃が最も発見しやすいので、園地をよく見回り、病患部の早期発見、早期処置に努める。
- (2) 腐らん病は、発生樹に隣接する樹に翌年も発生する傾向があるので、発病歴のある樹及びその隣接樹は注意して観察する。
- (3) 枝腐らんや胴腐らんは見つけ次第、剪除や削り取りを行い、切り口や削り取り部に薬剤を塗布する。6月以降、病患部からの孢子飛散が多くなるので、遅くとも5月中には処置を完了する。また、剪除した枝や削り取った病患部は園地内に残さないよう処分を徹底する。

りんご虫害

1 予報（5月）の内容

病害虫名	発生時期	発生量・感染量	予報の根拠
ハマキムシ類	—	並	(1) 4月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並だった。(±)
キンモンホソガ	第1世代羽化時期早	多	(1) 基準圃場（北上市成田）での越冬世代の羽化時期は、平年より早かった。 (2) 有効積算温度から推測される第1世代の羽化盛期は、平年より早い。 (3) 前年の第4世代の発生園地率は、平年より高かった。(++)
リンゴハダニ	早	やや多	(1) 基準圃場（北上市成田）でのふ化時期は、平年より早い。 (2) 3月下旬の巡回調査での越冬卵の寄生園地率は、平年より高かった。(+) (3) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
ナミハダニ	—	並	(1) 4月後半の巡回調査での発生園地率は、平年並だった。(±) (2) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)
果樹カメムシ類	—	やや少～並	(1) 簡易トラップによるクサギカメムシの越冬量は、盛岡市では例年より少なく(-)、金ケ崎町では例年並であった。(±) (2) 5月の気温はほぼ平年並の予報であり、特に発生を助長する条件ではない。(±)

記号の説明 (++)：重要な多発要因、(+)：多発要因、(±)：並発要因、(-)：少発要因、(- -)：重要な少発要因

2 防除のポイント

【ハマキムシ類】

- (1) 落花期にハマキムシ類、アブラムシ類等を対象に有機リン剤を用いる。
- (2) 訪花昆虫導入園では、それらに影響のないIGR剤やBT剤、ジアミド剤を用いる。

【キンモンホソガ】

- (1) 多発園（20果叢当たり5マイン以上の発生園）では、第1世代の羽化状況に応じて第2世代を対象とした防除を行う。前年多発園地では、本年も多発傾向にあるので、注意してマインを観察する。
- (2) ネオニコチノイド剤は羽化始期～羽化揃期、IGR剤は羽化始期～羽化盛期に使用すると効果が高い。羽化始期は羽化盛期の5日前、羽化揃期は羽化盛期の5日後が目安である。

表 キンモンホソガ第1世代羽化盛期及び防除適期の予測（4月26日現在）

地点名（標高）	羽化盛期（予測）	ネオニコチノイド剤による防除適期	羽化盛期（平年値）
盛岡（155m）	6月13日	6月8日～6月18日	6月第5半旬
北上（61m）	6月6日	6月1日～6月11日	6月第3半旬

※ 平年値は、平成25年から令和4年までのフェロモントラップへの誘殺盛期の平均からみた羽化盛期。

※ 羽化盛期は、当年の越冬世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期（北上は4月第2半旬、盛岡は4月第4半旬）を起点とし算出（平成22年防除技術情報）。

※ 4月25日まではアメダス現況値を、4月26日以降は平年値を利用した。

※ 観測地点の標高より100m増すごとに羽化盛期は3～4日遅れるので注意する。

【ハダニ類】

- (1) リンゴハダニの発生が多い園地では、落花期にサンマイト水和剤、ピラニカ水和剤、バロックフロアブルを用いる。なお、リンゴハダニ、ナミハダニの両方がみられた場合は、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布（落花期、落花10日後）が有効である。
- (2) ナミハダニの発生が多い園地では、粘着くん水和剤またはアカリタッチ乳剤の2回散布を行う。

【モモチョッキリゾウムシ】

- (1) 前年被害が目立った園地での落花期の防除薬剤は、効果の高い合成ピレスロイド剤を用いる。

【果樹カメムシ類】

- (1) 越冬成虫の飛来は、落花期前後から見られることが多い。例年発生が見られる園地では、この時期以降特に注意して観察を行う。
- (2) 飛来観察は、果実が餌となる周辺部の樹木（サクラ、クワ、キリ等）や防風ネット等も併せて随時行う。
- (3) 大量の飛来が確認された場合は、ただちに効果の高い薬剤を特別散布する。
- (4) 園地への飛来状況や発生量の予測等について、今後発表する情報に注意する。

3 防除上の留意事項

- (1) 養蜂活動が行われている地域で殺虫剤を散布する場合は、養蜂家と協議の上、散布時期を事前に通知するなど、ミツバチへの危害防止に努める。
- (2) サンマイト水和剤は、マメコバチに対して影響があるので注意する。